

歳月の経過

酒井 董美^{ただよし}

私たちが過ごしているこの世界の中で、不変な法則と問われれば「時間は過ぎて行く」という答えが返ってきそうである。そしてこの時間の経過によつていろいろなものの変化する。変わらないものはないと断定できそうだ。来月九日の誕生日を迎えると満八十七歳になる筆者である。よくぞここまで生きたものだと思う。

このごろ、なぜか昔のことが懐かしく思い出されてならない。両親や兄弟などの家族のことは言うに及ばず、子ども時代遊んだ友人たち、学校時代の恩師や学友、教師になってからの同僚たち、未だにつながりの続いている教え子の数々、あるいは研究仲間やそれについて教えを請うた先学の方々、言語伝承を研究対象としている筆者であるので、山陰両県内をあちこち収録に出かけたものであるが、初対面の筆者に対して、快く応じて民話を語ったり、わらべ歌など歌ったりしてくださった伝承者のみなさん、新聞連載でお世話になったマスコミ関係者……。教え上げればきりがないほどの人々と接して、筆者は今日を迎えているのである。

一方。同年の学友に限って言えば、おそらく既に八〇%は彼岸に旅立っているようだ。残っているものでも病気を抱えたり、歩くのに杖を手放せなかったり、車椅子で移動したり、あるいは介護施設に入っていたり、認知症になっていたりなど、いろいろ変化している現在の姿が聞こえてくる。

ところで、自身の経験を思い出すにつけて、懐かしいと思う反面、あれだけ子ども時代に訪問して親しかった仲間が、同じ松江市内に住んでいながら、この歳になって訪ねていこうという積極的な気持ちにはなぜかなれない。

社会人になって、東京での長年の会社勤めを終えて、定年退職後帰郷したということもあって、親しさが薄れたのか、その後出会うこともなく、賀状交換も数年前から辞めたこともあってか、当方から訪問する気持ちもさっぱり出て来ないのである。不思議なことと思うが、これが正直な気持ちなのだから仕方がない。いわゆる不人情ということではまったく異質のものではある。「歳月の経過」のなせるわざと言うほかはなさそうだ。

一方では、最近まで関係のあった人々とは、出かけて行って話したい気持ちはまだまだあるし、目下、民話語りのグループの定例会には積極的に出かけて、スピーチを引き受けている。一昨日の十三日には、倉吉市であった鳥取県民話サークル連合会役員会に、マイカーで出かけてスピーチするし、今日の午後には米子市で行われるほうき民話の会定例会に出かけ、情報交換の席で、大いに話そうと資料を整備したりしているところである。明晩はZOOMで全国の方々と話そうと楽しみにしている。

このようにして時間は確実に変化して過ぎて行くのである。



昔勤めた鳥取短期大学玄関付近